

## 集会運営スタッフのスピーチ

文責:T(集会実)

こんばんは。寮生のTです。一昨年九月に入寮して、ここ一年半ほどの間、裁判報告集会の運営に携わってきました。次の四月で吉田寮を離れることになり、最後の機会に、この場を借りてスピーチさせていただきたいと思います。

まず、個人的な話になりますが、私がなぜ吉田寮に入ったのかという話から始めます。もともと私は、京都で下宿して大学に通っており、寮とは無縁の生活を送っていました。博士課程に進学した後、中国に留学に行く予定だったのですが、新型コロナウイルスの流行によってオンライン留学に切り替わってしまい、実家のある福岡から留学するという形になりました。ただ、現地に行けないオンライン留学では辛いものがあり、また実家には京大の研究室や図書館などの施設を使えないことも問題で、京都に戻ることを考え始めました。

しかし当時は、いつ海外渡航が可能となるか分からないという状況の中で、渡航が可能になればすぐに留学に行きたい、というのが私の気持ちでした。たとえば、京都で賃貸の部屋を借りた後に、すぐに渡航可能になり、また部屋を引き払うとなると、お金がかかりすぎます。新型コロナ流行下では、飛行機代が値上がりし、また渡航後には隔離ホテルの宿泊代が必要になるなど、留学にあたって必要な金銭も増大しています。私の場合、賃貸の部屋を借りるしかない状況では、京都に戻って研究することはできなかったと思います。

しかし幸い、京大には金銭的負担の少なくて済む寮があります。家具の準備なども下宿に比べればはるかに楽です。留学からの予定変更が急だったこともあり、入寮募集に間に合う寮が吉田寮しかなく、そのまま自然と吉田寮に入ることになりました。それから一年以上が経ちましたが、無事に京大の図書館や研究室を利用しながら、研究を進めることができました。

私の入寮の経緯は以上です。まさに福利厚生施設としての吉田寮に助けられたのが私、ということが分かります。実はこのエピソードのなかには、吉田寮が自治寮であることの意義、言い換えれば、自治寮であるがゆえに担保された福利厚生の側面も含まれています。

たとえば、入寮を希望していた当時、私は休学中で、またいつまで住むかも分からないという不安定な状況でした。京大がやっている学生支援の多くは、休学中では受けることができなかつたり、年間限定などの制限が設けられています。公的機関による上からの支援では、どうしても一律の条件が設定されてしまいがちです。自治によって運営され、寮が誰に開かれているべきか、常に自分たちで考えられている場だからこそ、福利厚生施設としての役割を全うできているのではないかと考えます。

さて、こうして私一人の事例を考えただけでも、福利厚生施設としての吉田寮がいま危機に瀕していることの意味がよりはっきり分かります。いま、吉田寮は大学当局に明け渡しを要求されているわけですが、これに対して、「新棟・現棟をそのまま寮として使うのな

ら、大学当局が管理してもいいのではないか」という意見もあるかもしれません。しかし、それでは福利厚生施設としての役割を全うできないのです。まず、自治であるからこそ担保できる寮としての役割があるということを、強調しておきます。

つまり、私が入寮できたのは、寮自治が今日まで続いてきたからに他なりません。そして吉田寮の自治は、寮生、寮外生、地域の方々、なんとなくふらっと遊びに来た人、支援者の方々……などによる、多様な人々の大きな輪の中で存在してきたものです。私が初めて集会に参加して驚いたのは、吉田寮に関心を持つ方、支援していただく方の数の多さであり、また主体的に集会の運営に参加する寮外生の数々でした。

ここで、吉田寮のもう一つの大きな柱についての話題に移ることにしましょう。吉田寮がこれだけ多くの人が集まる場になっているのは、吉田寮は開かれた場であること、少なくともそうあろうと志向している場所であることと、深い関係にあると思います。

吉田寮は福利厚生施設であるとはいえ、京都大学の学籍がなければ、入寮することはできません。また、そもそも京大自体が、公的空間でありながら、受験制度や入学料・授業料によって選別された一部の人しかアクセスできない場であり、その傾向は近年ますます強まっています。

こうした問題意識のもと、吉田寮は「開かれた場」でありたいという理念を掲げ続けてきました。たとえば寮の食堂は、ライブ・演劇・集会・コンサートなどの催し物のたびに、いや催し物がなくとも、寮外から多くの人が集い、ともに自治空間を作ってきました。

私は、吉田寮が自治寮であること・福利厚生施設であることと、開かれた場であることは、セットで成立するものであるように感じています。そもそも、入寮に学籍が前提とされている以上、吉田寮という場が似た価値観を持つ人で固まりやすい傾向があることは否めません。しかし、自治を進めるにあたっては、異なる立場の人への想像力が必要不可欠です。閉鎖的・同質的な場では、異質なものを排除する営みが優先されがちで、福利厚生の門戸が狭くなってしまいます。吉田寮の自治と福利厚生は、吉田寮が開かれた場であるからこそ、よりいっそうの意義を持つのだと思います。

特に、大学当局からの攻撃を受けている現在の状況下では、寮生だけで寮自治を続けて行くことは困難です。寮外の方々からのさまざまな形の関わり合いがあつてこそ、吉田寮は存続することができています。私はもうすぐ寮を出ますが、今後、私自身も吉田寮に何らかの形で関わり続けていきたいと考えています。それが可能なのが吉田寮という場所です。

現在、吉田寮自治会は大学に繰り返し訴訟の取り下げを求めています。いまだに糸口は見えません。仮にこのまま大学が裁判を取り下げず、寮生への学生生活の圧迫が続いた場合、より多くの方の助けを必要とすることになるでしょう。

ぜひ多くの方に吉田寮との関わり合いを持ってほしいです。みんなで吉田寮を支えていきましょう。